

昭和近日常記の附録(高橋弘毅)

天皇はこれを聞いて、大要勇気づけられた。というのは、前年の十月ごろから側近に戦争で倒つた国民を慰めるため、全国を回りたい、と渡らしていたからである。加藤進は、二年ほど前私に、「四七年八月ごろまとめたもの」と断つて、次のような手書きの原稿のコピーをくれた。四六年四月ごろ、天皇から直接聞いた巡幸についての気持ちを加藤がまとめたものである。

「戦争を防止できず、国民をその惨禍に陥らしめたのは、誠に申し訳ない。この際、位を退くことも一つの責任の果し方であらうと思ふけれども、私は方々から引き揚げてきた人、親しい者も失つた人、困つてゐる人達の所へ行つて慰めてやり、又働く人を励ましてやつて一日も早く日本を再興したい。このためには、どんな苦勞をしてもかまはない。さう働くことが、私の責任であつて、祖先と国民とに対し責を果すことになるのだと思ふ。又、かうして働いてこそ新憲法の精神に従つた国民と皇室との關係を確立できるので、これがポツダム宣言の忠実な履行になるのではあるまいか」

昭和近日常記 1946年(11月1日) G H Q 所から

二、日本内地に充分なる食糧ありや否や。

内地に於ては、金儲けという強い利己心から、闇取引、闇市が盛んに横行してゐる。この事實は日本人の道徳の低下を物語るものである。この状態を改善し、闇の必要な食糧の正当なる分配の出来るようにする為には、日本人の真心を呼び醒まし、これを密い立たせねばならぬ。これはM.A.の力及ばぬところで、単り天皇のみを為し給ひ得るところであり、思うに今がその絶好の機会ではあるまいか。天皇は須らく御親ら内地を広く巡幸あらせられて、或は炭坑を、又或は農村を訪ねられ、彼等国民の語る所に耳を傾けさせられ、又親しく談話を交えて、彼等に色々な質問をなし、彼等の考えを聞かざるべきである。そして還幸の後、遍く国民に対して犠牲的精神の發揮、國民的責任の自覚及び民族將來の希望に關し、國民胸中の真心を呼び醒ますべく御諭しあるべきである。

昭和近日常記 1946年(11月3日) G H Q 所から

天皇の御旅行に付て

陛下は御旅行に先立ちて、國民の食糧問題及び農業問題に付て、一般の情報及び政府の報告を御研究遊ばざるべきである。

農民は國民中の四割三分を占むる大多数の人口であるから、農民の利害こそは陛下の最もお気を止めさせられねばならぬものである。しかし、それと同時に國民の住宅問題、健康問題、教育問題等に於ても、政府及び公共団体の機能がよく働いてゐるかどうかに付ても御關心あるべきである。(甲略)

陛下が如何に國民の幸福に御關心あるかということは、新聞その他の文章によるよりも、直接御行動によりて、彼等に知らしむを可とす。

●やれ、やれ、終わった

(南武・会社員・36歳)

えーっと……見た、見た。ぼくらは教員の小学三年生で、もうずいぶん長い時間、沿道に並ばされて立っていました。人間天皇になったというのに、先生からは「通られるときに、絶対に顔を上げてはいけない」といわれていました。「顔を上げて天皇の顔を見たら、首がすつ飛ぶ」といつている生徒もいました。

ぼくらは待ちくたびれていかげん疲れていました。そのとき「きた、きた」とみんながいったので、顔を下げました。先生はもう一度「顔を上げてはいけない」と念をおしました。でもぼくは、顔を上げて苦しかったので、ひよいと顔を上げたら、バスに乗っている天皇を見ました。

「あ、しまった!」

と叫びました。天皇は、顔がいやに黒く、眼鏡が光線で白くぼく光っていました。車は国道をゆっくり過ぎて行きました。ぼくらは、「やれやれ、終わった」と思いました。十月の、晴れた昼すぎのことでした。

●声を、見た

(芝田由子・マッサージ師・32歳)

私は目が見えないので、天皇を見ていません。でも、私は松山の盲学校の二年生のときに、天皇の前で点字を朗読させられて、声を、天皇を見ました。天皇は、おだやかで、気品があり、色が白くてひ弱な感じのする人です。

私はやはり緊張していたのか、あくる目熱が出て学校を休みました。学校では、菊の御紋のついたモナカをもらったそうです。食べられなくて惜しいことをしたと思っています。

●まぎれもなく、人間

(稲富一雄・会社員・43歳)

私は、満州奥地からの引揚者でした。天皇の軍隊に置きざりにされた私たちは、難民になりました。目を覆うばかりです。「私はこの手で自分の子の首を絞めて殺した」と狂つたように泣き叫ぶ母親、助けぬ親を殺してきた子。私はそういう乗民の、慙愧と呪いを聞きつづけて日本にたどりつきました。だから、かなり屈折した気持ちで、天皇の九州行幸を見ました。私はまだ十九歳の学生でしたが、その日の光景はかなりはっきりと覚えています。

小旗の波の中を遠くからかけろうのようにゆれて、天皇の車の列が来ました。

私たち学生はそれまで「天皇の通り道がきれいになるなら、たびたび来てくれると助かるな」などと話したものです。

しかし、生身の天皇との出会いはショックでした。車窓の奥の天皇は、まぎれもなく人間でした。私は、それまでもちつづけていた天皇に対する自分の負い目が、風船玉がしぼむように、急速に萎えていくのを知りました。胸の中にかえていたもやもやが消えていくのを、得体のしれぬ複雑な思いでながめていました。

(あの人も大変だなあ)と感じたようです。

●ありがたさに泣いた

(熊谷安子・商店員・66歳)

私の主人はビルマで戦死しましたが、そのときのいきおいやかなら、天皇の責任やないしな。はい、あんな、写真と同じですわ。色白い人かと思うたら黒い人やなあと思ひました。娘の頭をなでてくれよって、私、ありがたくて、涙流しよりました。

児玉隆也『君は天皇を見たか』「テンノウヘイカバンザイ」の現場検証(潮出版社、1975年)から

『私たちの学生時代 神戸女学院ものがたり』(「私たちの学生時代」を発行する会、1999年)

六月十二日には天皇をお迎えした。早くから入念に掃除をし、自治会役員はお接待に備えて検便までした。天皇が到着され、バイオリンの奏でる君が代が聞こえると反射的に直立不動の姿勢になってしまったが、お帰りの折り、至近距離で拝した天皇は、これが宮城遙拝した奉安殿の御真影の主だったのかと驚いたほど、背の低い色黒の無造作なまさに人間的な方だった。(205 ページ)

感想

- ・終戦後に於いて種々陛下を批判申し上げたが、行幸を仰いでそのような気持ちはすっかり無くなり、唯有り難いのみであった。
- ・幸せにも行幸の日を仰ぎ得たその幸福を忘れることなく、生き抜きたい。
- ・言葉では言い表し得ない、また、理屈などで忘れて唯、有り難さの一念のみ、心を尽くして国のために尽くすべく心に誓った。(223 ~ 224 ページ)

『毎日新聞(大阪版)』1947年6月13日

嬉し泣きの二部合唱

神戸女学院で幕の内弁当の簡単な御昼食を摂られたのち陛下はお部屋の窓辺に立たれ濃緑の林の中に点綴するミッションスクールらしい色の校舎や美しい芝生をあかずに御覧になっていたが”陛下が窓に””アお笑いになつた”とハンカチを振り歓声をあげる女学生の姿にやわらかいほほ笑みをなげられた。窓下に集つた七百余の生徒の口から讚美歌四百十二番”わがやまとの国を守り”が沸くように流れて来た。お部屋を出られた陛下に捧げる歌声はやがてすすり泣きをともなつて来た。歌は終わつたが陛下はじつと立たれたままお歩きにならない。生徒達はハンカチで顔をおおいながら再び歌を繰返した。嬉し泣きの二部合唱だった。

女学生たち「しつこくもに」
 「陛下が窓をのぞいてみた——」と窓のそばにいた二部の合唱隊の女学生は、陛下の御姿をのぞいてみた。陛下は「わが大和の國をまもる……」と歌をうたへて、陛下は「せめておめしたまえ、わが神……」と歌をうたへて、陛下は「さういふ言葉をうたふなアロダイ……」と陛下は耳をかたむけ、うたへて聞かれた。

陛下が窓をのぞいてみた。陛下は「陛下が窓をのぞいてみた……」と陛下は耳をかたむけ、うたへて聞かれた。

陛下が窓をのぞいてみた。陛下は「陛下が窓をのぞいてみた……」と陛下は耳をかたむけ、うたへて聞かれた。

天皇陛下を御迎えして

兵庫縣教育部長 堀 隆 三

天皇陛下が終戦後初めて關西に行幸になると聞いてからの私達は、全く一日千秋の思いでその日の来るのを待つていたのであります。

それは戦争の続いた幾年かの間、殊にその終結前後に、一般國民の到底知りつくせない御心勞を御重ねになつたことが、私達にもほのかに御推察し得る機な氣がすると同時に、又、皆のそういう氣持は言葉で申し上げないでも一人一人の國民の顔を御覧になれば、すぐにわかつて頂けるものという様に皆が考へていたからではなかつたでしょうか。それにしても、教育關係の御視察をそんな風に御日程に入れて御願ひするかについては、知事以下關係者が、再三協議をかさねた結果終戦後約一年半経つた今日、教育がそんなに立ち直つてゐるか、即ち戦災を受けた學校はどこか、種別的に數校を選んで、その状況を如實に御覧に入れることに決定し、それらの學校を選定したのであります。

それは非戦災校として縣立神戸一中と西宮の神戸女學院、戦災校として武庫川學院・神戸湊川小學校・姫路の城巽・野里の兩小學校とであります。この外に信愛學園、其の他もありましたが、これは社會事業として御視察を願つたのであります。

朝日 (下) (1947.6.13)